

いつも厳しい祖父のドルスが、名の日の祝いでもないのでご馳走を作ってくれたのは、おかしな夢を見た次の日からでした。いつもならどやしつけられるようなへまをやつても怒りませんでしたし、森から一番近いハドラの村への買出しに連れて行ってくれたときも、村の子供たちと口をきいても平気でした。いつもは近づいてはいけない森の深くにまで一緒に連れて行ってくれ、たくさん珍しい草、動物、木の実や果実などを教えてくれるようになりました。

十歳になったら入つてよいと約束されていた地下の部屋にも入れてくれるようになり、付き切りで勉強を教えてくださいました。地下の部屋で見た本は今までに見たことのないような本でした。そのどれもがおどろおどろしく、危険で、刺激が強すぎるものでしたが、あなたは不思議とその勉強に魅了されていきました。とりわけあなたの気を惹いたのは、『悪魔の書』と銘打たれたボロボロの本でした。その勉強はあなたと相性が良かったようで、砂漠が雨を吸収するように、見る見るうちに悪魔召喚の技術を習得していきました。心の中で《友人》に泣きつく事も少なくなり、降って湧いたような幸せな日々には首をかしげながら、いつまでも祖父の機嫌がよければ良いな、と思っていました。

その夢は、不思議な夢でした。古いお城の玉座をたくさんの悪魔が囲んでいます。恐ろしい悪魔、美しい悪魔、強そうな悪魔、ずる賢そうな悪魔……たくさんの悪魔は全員、玉座に座る人間を見ています。玉座に座っているのは、あなたでした。こんなにたくさんの恐ろしい悪魔に囲まれていながら、あなたはちつとも怖くはありませんでした。彼らのまなざしを見ると、むしろ親しみさえ感じました。あなたは玉座から彼らを見下し、命令します。

「行っ」――。

それまでも、森の中の祖父との二人きりの生活がさびしかったことはありませんでした。ドルスは厳しく、気難しいお爺さんでしたが、叱るときもほめるときも、どんなときも正面からあなたと向き合ってくれたからです。あなたはドルスが大好きでした。

それに、あなたにはもう一人話し相手がいきました。それはある時から自分にだけ聞こえる暖かい声でした。彼の声を初めて聞いたのは、一人で川で遊んでいた時に苔に足を滑らせ、溺れて流されてしまいそうになった時でした。「右手の枝に掴まって！」突然頭の中に声がしました。溺れながら、言われたとおりに右腕を伸ばし、枝を掴んで一命を取り留めました。しかし、どこを探しても声をかけてくれた人は見つかりません。それは、あなたの心にだけ聞こえる声だったので

した。

彼は《友人》と名乗り、遠く世界の中心からあなたに語りかけているのだと言いました。祖父に叱られて泣いているとき、一人きりで留守番をしているとき、《友人》は優しく話しかけてくれて、たくさんのことを教えてくれました。《友人》はあなたにとってかけがえのない存在となり、何でも話せる心の通った友だちになっていました。彼に会いたいと何度も頼んでみましたが、大人になつたら会える、とはぐらかされるばかりでした。しかし、あの夢を見てからは彼の返事も変わってきました。なんと、そろそろ会えるだろうというのです。まったく、あの夢を見てからいいこと尽くめでした。

幸せな日々を壊したのは、一人の来訪者でした。黒いマントを羽織り、銀の髪をした二十歳くらいの男です。祖父ドルスは彼が玄関に現れる前から、その来訪を知っていました。「アゼルがやってくる」そう言った祖父の顔には怒りと、深い絶望が同時に表れたように見えました。そしてその男が玄関に現れると、ドルスは立てかけておいた魔法の杖を取り、いきなり《炎の玉》の呪文を相手にぶつけました。あまりのことに声も出ませんでした。その男が爆発する炎の玉を受けて平気で笑っているのです、あなたは心からその男が恐ろしくなりました。

「祖父よ、大人しくソロモンの指輪を渡せば良いものを。されば、その小僧も貴方も生きていられたであろうに」

その男は自分のことを「影の王」と名乗り、ドルスに魔法戦を挑みました。結果は無残なものでした。ドルスは「影の王」の使う風の悪魔、スレイマンの変幻自在の魔術に手も足も出ず、自分を楯にしてあなたを守ることで精一杯でした。「影の王」が指輪を掲げ、家の外に飛び出しました。すると、家を包むように風が吹き荒れ、竜巻が巻き起こりました。すぐに家の中にいる二人の息はだんだん苦しくなってきました。息も絶え絶えだったドルスはその場に崩れ落ち、小さな声で言いました。

「悪魔を呼べ」

あなたは思いつく悪魔を力の限り叫びました。

「メフィスト、アモン、アシユメダイ！ ヨウゴ、ウシャス、バルビュート！」

現れたのは五人の悪魔でした。それは童人、鳥の顔をした獣人、胸に第三の瞳のある女、狩衣を着た女、後光差す異国の女の五人でした。

「主よ、一千年の時を経て、よくぞ私を呼び出して下さった。お久しゅう——いや、今のあなたにとってでは始めまして、か」

その内の一人の童人が、にこりと笑ってそう言いました。そして、鳥の顔をした悪魔を連れ立って家の外に飛び出しました。家に残った3人の悪魔の内の一人、狩衣を着た女が広げた両手から札を飛ばし、それが家のそこかしこに張り付くと、風はすぐに収まりました。息ができるようになりますと、緊張の糸が切れたのか、立っていられないほどの疲れが一気にやってきました。祖父はその様子を見て、力の強い悪魔をこんなに召喚することは自殺行為だと叱りました。その後で、やはりお前はクラウゼウスの子だ、と嬉しそうに呟きました。稲妻や業火、そして吹き付ける突風が家の外で激しく音を立て、光を放っていました。

ほどなくして、辺りが静かになりました。外ではまだ風が吹いています。家の扉が開き、誰かが中に入ってきました。それは、童人でした。童人は、スレイマンは去っていったと告げました。鳥の顔をした悪魔はどうしたかと聞くと、少し戸惑ってこう言いました。

「アモンは敵味方の区別なく破壊したがるので、私が魔天へ選したのだ」

「それは賢明でしたね、メフィスト。奴の炎は容赦なく森を焼くので、私の結界もそろそろ限界でしたよ」

狩衣を着た女が頷きました。後光できらきらと輝く女がそれに続きます。

「主様にとつての真の幸運は最後の悪魔が現れなかったことでしょう……。あの者が呼び出されて

いれば、主様は破滅しておりました」

その場にいる皆がそれに同意しました。呼び出すことのできなかったバルビュートとは一体どんな悪魔なのかと、あなたは空恐ろしくなりました。彼らは脅威が去ったことを確認し、自分たちの世界へ帰っていききました。小屋にはドルスとあなただけが残りました。床に伏したドルスは、突然小屋に《炎の玉》の呪文を放ちました。あつという間に小屋は炎に包まれました。

「一人で、森を行け」

床に寝たまま、ドルスはそう呟きました。

「一緒には行けん。お前は一人で森を駆け、玉座を目指すのだ」

ドルスはもう動けないようでした。そして、最期にあなたに打ち明けました。あの影の王、アゼルこそが、皇帝クラウゼウス——つまりあなたの父であり、ドルスの息子——を殺した張本人であること。秘密の部屋で読んだ本は、世界でただ二人、つまり、あの影の王、アゼルと、あなたにしか使えない本であること。秘密の部屋の本がアゼルの手に渡らないために、この小屋を焼く必要があること——。

涙で滲む森を駆けながら、ドルスの言葉を思い出します。

わが孫よ。ソロモン一族最後の者よ。禁忌の森を抜け、アゼルに滅ぼされたソロモンの城を

目指せ。玉座で力を手に入れるのだ。アゼルと悪魔は世界に破滅をもたらすだろう。呪われしアゼルを止められるのは、同じ力——悪魔の召喚の力を持つお前しかない。孫よ、悪魔の書を書いてい出せ。そこにはお前を助けてくれる四十八の仲間がいる。彼らは、魔の王たるお前の命令を待っているのだ。

あなたは何度も後ろを振り返ります。胸には黒い水晶のペンダント『夜のタリスマン』と、腰には魔術師用の魔法の小刀^{ダガ}、背負い袋の中には召喚に使う『血の石』がひとつ、送還に使う『ソウルキャンディ』がひとつ、食料が2食分と、金貨二十枚。たったこれだけの装備で、危険な森を抜け、ソロモンの城を目指さねばならないのです。夢中で駆けていた最初のうちはまだ良かったのですが、疲れと恐怖が体を蝕み始めると、とたんに絶望でその場に立ち尽くしてしまいそうになりました。そんな時、心にあの暖かな声が響いてきました。

それは、『友人』の声でした。

「大事な私の友だち。あなたを救って差し上げたいのですが、私には大きな力がありません。私の言うことを、よく聞いてください。これから話すことはとても大事なことです。忘れないでいれば、あなたを救ってくれるかもしれません」

「まず、『夜のタリスマン』を大事に持っていてください。そのペンダントは一度だけあなたを死「次に、夜になったら身を隠してください。できるだけ、安全な場所を見つけるのです。昼は私があなたを護りますが、夜になれば悪魔スレイマンの力を抑えきれなくなってしまうのです。今はあなたの呼んだ悪魔のお陰でスレイマンの魔力が弱くなっていますが、いつその力が戻るか分かりません」

「最後に、困ったことがあれば、私を呼んでください。一度だけ、小さな奇跡を起こしてあなたを助けられるでしょう。心がくじけそうになったら、あなたの友人がここにいることを思い出してください。私はいつでもあなたを見守っています——」

《友人》の声は途切れました。朝日は森を照らしています。この日が落ちるまでに、何とか「影の王」アゼルの目から逃れられる場所を探さなければなりません。

進路は南。

禁忌の森を抜け、無の荒野『禍國』を超えて、ソロモンの城の玉座を目指すのです。迷いの森、底なし沼、肉食樹、巨大生物、スフィンクスなど幻獣たち、城を支配する魔の女王……幾多の困難を乗り越え、知恵と勇氣と四十八の仲間たちによって、試練に打ち勝ちましょう。イラジエルの民たちが、皇子であるあなたの帰りを待っています！—— 1へ。